

「銀泉台の携帯トイレ回収ボックスの設置について」

～ひとがうまく自然とかかわっていけば

自然はそれに応えてくれる～

山のトイレを考える会 運営委員

手嶋 真智子

あ、そこを右に. . .

私たちを乗せた車は、道道1162へと右に大きくハンドルをきった。

ほどなく道はアスファルトから砂利道へと変わる。木々の合間からは川の流れて見取れる。それまでたわいもない話で盛り上がっていた車内は一瞬で静まり返った。

自然はいつも美しい。でもそれを守るのも壊してしまうのも私たち人間だ。そのときはそんなことまでは考えも及ばず、ただぼんやりとその美しさに癒しをもらっていた。

【設置まで】

それは設置数か月前のこと。「山のトイレを考える会」月に一度のミーティングで、景観を損なわない広告塔的な携帯トイレ回収ボックスを作れないか？という話題になった。経費を抑える意味でも業者の方に頼むのではなく、DIYでカスタマイズ出来ないかと。私の脳裏にはひとりの友人の顔が浮かんでいた。彼ならきっとこの要望に応えてくれる。そう思った次の瞬間、もうわたしは中村氏の名を口にしていました。わたしの気の短さが良い方向に向いた数少ない例かもしれない。

会の承認を得、仲俣事務局長と共に中村氏のところに事の経緯とお願いにあがった。遅れて着いたわたしの前には、すでに何年来の友人のように談笑する二人が。この二人が出会ったらきっと何かが起きる。これはビックバンだ！と確信した。

確信は当たっていた。この携帯トイレ回収ボックス作りは設計から始まった。素案を事務局長が示し、それを中村氏が具体化していく。図面の段階で幾度もやりとりがなされ、作り手と依頼者が想いの距離を縮めていった。物作りが好きな人にはたまらない瞬間のようだ。物作りド素人のわたし。こんなに心地良い「かやのそと」を感じたのは生まれて初めてかもしれない。



設計図に基づき材料を調達・加工



現地組立可能にて施行

設置場所は大雪山銀泉台登山口とした。登山者も多く既存の回収ボックスも未設置であった為運営委員の意見もすぐにまとまった。ただ、木という特性と大雪の厳しい自然。その耐久力が未知数であり不安もあった。中村氏の発案で、本体の枠には防腐剤注入のツーバイ材を、上面は屋根材のトタンを継ぎ目なしで施行。全体にはガーデニング用のガードトラック塗料を塗布。本体は見た目もよくなるよう内側からの板張りで施行。形状は組立式とし、シーズンオフにはコンパクトに収納できる配慮を施した。利用者数の把握のためカウンターも設置。既存の回収ボックスには誤作動が多いことを相談したところ、誤作動防止仕様のカウンターに仕上げてくれた。

秘密基地のような中村氏のガレージでみるみる組み立てられていく回収ボックス。中村氏が電動ドリルを持った魔法使いに見えたのはわたしだけだろうか。



誤作動防止仕様のカウンターを取付け

設置は昨年6月最終週、中村氏・当会仲俣事務局長ほか運営委員三名・NPOかむいの濱田氏・森氏の協力を得て無事完了し、上川町に寄贈することができた。



銀泉台登山口のトイレ前に設置



大雪山で初めての木製回収ボックス

(注) 本回収ボックスは2021年度ほく一基金「北海道生物多様性保全助成制度」の助成金を使用しました。

【維持管理の難しさ】

大雪山国立公園主要登山口19箇所のうち、銀泉台の回収ボックスは13箇所目の設置となった。既存の回収ボックスには、ゴミ箱と間違われ一般ゴミの混入がたびたびあるため施錠を余儀なくされている所がある。長い縦走を終え安着に酔いしれる前にまずは回収ボックスの小さな鍵と格闘しなくてはならない登山者。本当に気の毒である。しかし回収ボックスへのゴミ投棄がある以上は施錠せざるを得ない。回収ボックスは維持管理する側に立った視点が不可欠である。コロナ渦での回収する方たちのリスクを考えると、やみくもに回収ボックス設置を推し進めるわけにもいかないであろう現実が見えてくる。利用者と維持管理者。その最大公約数を見つける努力を継続していきたいと切に思う。回収ボックス作りました！バンザイ！ではないのである。しかし、我々も様子を見に行きたい気持ちを持ちながらもなかなか行けずにいたことが本当に心苦しい。今年は実際に携わっている方々の話に耳を傾け、今後の活動の参考とさせて頂きたく思っている。

【今後に向けて】

大雪山国立公園内での携帯トイレブースは、黒岳石室と旭岳石室・中岳温泉（仮設）・赤岳（仮設）・高原温泉・トムラウシ山・ニペソツ山・美瑛富士避難小屋の8か所。トイレは黒岳石室・白雲・忠別・ヒサゴ沼・上ホロの各避難小屋に併設されている。「大雪山国立公園携帯トイレ普及宣言」にもあるように、『大雪山系では携帯トイレを使いましょ

う』とあるが、登山者の側からすると、回収までが担保されないとなかなか手を出しにくいかもしれない。やはりトイレがあるのが一番望ましい。しかしそのトイレの維持管理がまたまた大変なのである。悩ましい。しかし、大雪山の豊かな自然を守るために今出来ることを模索し、その歩みをとめないことが、何より大切なことのように感じている。

遥かなる頂きを目指す長く苦しい山行でも、諦めなければその一步は確実に「その場所」に近づいている。諦めなければなんとかなる日も訪れるかもしれない。未来に繋がる行動と、その行動を根付かせる仕組みの構築に向けての準備に取り掛かれたらと思う。小さな歩みであっても。

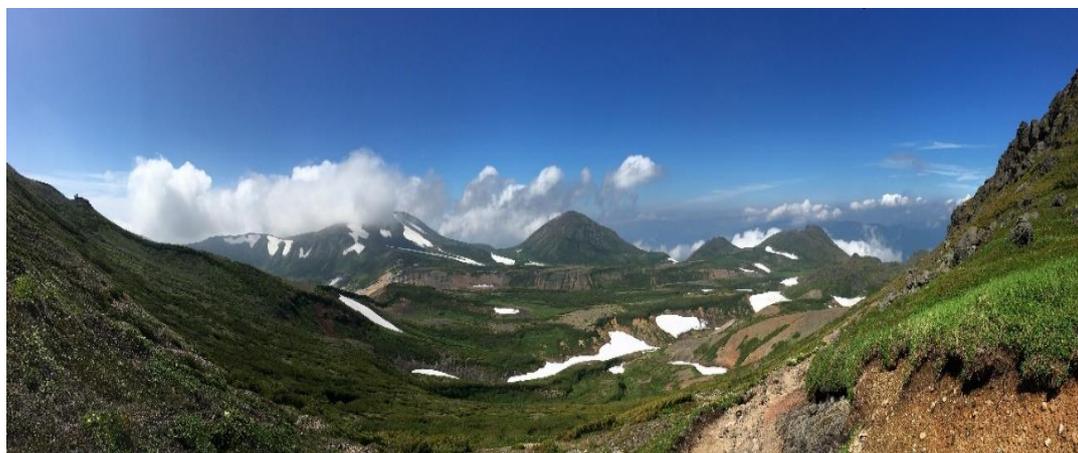
昔刑事ドラマで「事件は現場で起きているんだ！」という名台詞があった。山もそうだ。現場の惨状はその場に行かなくては感じることはできない。

自然の悲鳴に耳を傾けてみよう。まだ間に合うはずだから。



銀泉台トイレと赤岳方面

銀泉台携帯トイレ回収ボックスのカウント数は138個。少なくとも138人以上の方が利用してくださった計算となる。この時のわたしたちは、ただ一人でも多くの登山者が携帯トイレを使うきっかけになればと。そして車は次の目的地、美瑛へと向かった。



北海沢から見た北鎮岳・凌雲岳・黒岳（右）